

「諸病源候論」における歯病の分類について

その一．牙齒痛候，牙痛候，齒痛候について*

佐藤恭道** 別部智司** 戸出一郎**

「諸病源候論」¹⁾ (以下「病源」) は、隋の大業6年(610) 巢元方らが勅を奉じて編纂した病理・病因・病態学全書である。

このような専書は中国でも他に例がなく、中国古代の医学の解釈は本書があって初めて可能となり、また後世に与えた影響には計り知れないものがある。唐代以後、「外台秘要方」「医心方」「太平聖恵方」「聖濟総録」などの医書はすべて本書を基礎として編述されている。これらの医書では各項目のはじめに「病源」を引用して病因・病態を説明し、次いで諸方書から引いた治療法を列挙するという編集方法がとられている。

「病源」に記載された症候は、中国古代から六朝時代を経て隋に至るまでの、当時知られていたあらゆる疾病を網羅している。全40巻、67門、1726項により構成され、懇切丁寧にして精緻を極めた内容である。そのため屢々重複するところがあるが、読者は部分的に各項目を読むだけで理解できるので甚だ便利なものとなっている。

歯牙疾患は巻二十九に「牙齒病諸候」として21症候に分類して記載されている。

牙齒痛候・牙痛候・齒痛候・風齒候・齒斷腫候・齒間血出候・牙齒蟲候・牙蟲候・齒蟲候・齒齲

注候・齒蠶候・齒挺候・齒動揺候・齒落不生候・齒音離候・牙齒歴蠹候・齒漏候・齒齲候・拔齒損候・齲齒候・齒黃黒候

この症候分類では、近似した症候はまとめて並列されている。例えば牙齒痛候・牙痛候・齒痛候はいずれも歯牙の疼痛を主訴とする疾患であり、風齒候・齒斷腫候・齒間血出候は風によって起る歯周炎であり、牙齒蟲候・牙蟲候・齒蟲候は蟲によって歯牙が蠹食されたもので、おそらく現在の齲蝕に相当するものであろう。

これらの症候は言うまでもなく東洋医学的根拠に基いて分類されたものである。本論では分類の根拠を明らかにして、牙齒病諸候の実態と分類の意義について考察を加えるつもりである。

牙 と 齒

「説文解字」に「牙は壯齒なり」とあり、段玉裁の注には「壯は大なり。壯齒は齒の大なる者なり。……前、唇に当る者を齒と称し、後、輔車にある者を牙と称す」とある。段玉裁は唐・唐元度の九經字樣²⁾や唐・慧琳の一切経音義³⁾に基いて、牙は壯齒(大きい齒)即ち臼齒であり、齒は前齒であるとした。

今段玉裁の説に従って「病源」の症候をみれば、牙痛は臼齒部の疼痛で、齒痛は前齒部の疼痛を意味し、牙齒痛は臼齒と前齒の両方にわたる疼痛を意味するものである。

牙 齒 痛 候

牙齒病諸候の冒頭には牙齒痛候が挙げられてい

* Classification of the Dental Diseases in "Zhu Bing Yuan Hou Lun" Part I. Classification of the Toothaches

** Yasumichi SATO, Satoshi BEPPU, Ichiro TODÉ: Department of Anesthesiology, School of Dental Medicine, Tsurumi University (Chief: Prof. Yoshihiro AMEMIYA) 鶴見大学歯学部麻酔学教室 (主任: 雨宮義弘教授)

る。牙齒痛候の解説には「牙齒痛はこれ牙齒相引きて痛むなり。牙齒はこれ骨の終る所、髓の養う所なり。手の陽明の支脉は齒に入る。若し髓氣不足すれば、陽明の脉虚して牙齒を榮すること能わず、風冷の傷る所となる。故に疼痛するなり。又、蟲ありて齒牙を食するときは則ち齒根に孔あり。蟲その間に居す。又、伝え受けて余齒また皆疼痛す。これ則ち針灸して瘥えず、藥を傳すれば蟲死して乃ち痛み止む。」とある。

本文では、まず牙齒痛の症状をのべ、次に経絡の所属を明らかにしている。「骨の終る所」とは腎經の主りであることを意味し、「髓の養う所」の髓とは腎氣のことを言うのである。

靈樞、經脉篇にもあるように、齒の栄養は直接には手足の陽明脉によって支配される。「手の陽明の支脉は齒に入る。若し髓氣不足すれば、陽明の脉虚して牙齒を榮すること能わず。風冷の傷る所となる。故に疼痛するなり。」とは、齒を栄養している陽明脉の働きが劣えると、その經における気血の流れが悪くなり、牙齒を十分栄養することができなくなる。このような虚の状態に陥った時に外部から風冷の邪氣が陽明脉に随って齒に侵入し、齒痛を起させるというのである。

この病理論は漢代に成立した黄帝内經素問・靈樞等のいわゆる内經医学に基くものである。内經医学の理論は経絡を軸とし、陰陽五行説を背景として展開される医説であって、「病源」における生理・病理論や脉論は、この内經医学から引用され、加うるに養生方をはじめ当時存在した医説をとり入れて組み立てられたものである。

牙齒痛候の後半には内經にない医説が述べられている。その説は蟲によって齒牙が蠹食されて孔があき、そのため痛みが起るというものである。さらにこの場合の治方として、鍼灸では治らず、藥を帖布すれば蟲が死んで痛みが止むということまで述べられている。

この医説は内經の経絡説とは関係なく、局所的病理論であり、また局所的治療法である。蟲が齒を食うという考えは何時ごろからあったのであろうか。

長沙・馬王堆三号墓から出土した帛書のうち、

いわゆる「五十二病方」⁴⁾の中に「貳食（蝕）齒、以榆皮、白□、美桂、而并□□□□傳空（孔）」なる一文がある。

貳は苗葉を食う虫で、この虫が齒を食し孔があった時に、榆皮以下の処方をもシバの孔につけるように指示されている。

「五十二病方」は字体から見て、おそらく秦代から前漢にわたる頃の医方の記録であるから、齒を虫が食して孔があくという理論と、その孔に藥を帖布して治療する方法は、既に秦漢の時代には存在したのであろう。

更に遡って1200 B C頃、中国殷代に記録された甲骨文には「齧」字があり、その形は齒中に虫入るさまを象っているという⁵⁻⁸⁾。この説には疑問があり、筆者は賛成できないが、虫によって齒が侵蝕されるという考えは、それほど古くからあったことは想像に難くない。

「医心方」治齧齒痛方に引用される葛氏方・小品方にも同様の理論が散見する。両方書の成立は隋を遡ること遙に遠く、葛氏方は東晋4世紀に成立し、小品方は劉宋王朝の時代（420～479）に成ったことが明らかにされている⁹⁾。

これらの例から考察すれば、「病源」の医説は内經医学に基いてはいるが、更に当時流通していた医説を広くとり入れてまとめられたものと思われる。

牙 痛 候

牙痛候は牙即ち臼齒部の疼痛の症候を述べたものである。説明文には若干の省略があるものの、文意は牙齒痛候と全く同じである。

齒 痛 候

これは前齒部の疼痛を主徴とする症候で、その病理・病態・治方は前2者と同様である。ただし本候では治方のあとにつづいて「其の湯熨針石は別に正方あり。補養宣導は今後に附す」と述べ、つづいて養生方の咒法が述べられている。この一句は養生方を引用する場合、その直前に置かれる常套語である。このあとに養生方の引用文が続く。

「養生方に云う。常に本命の日に向いて髪を櫛

ずるのはじめ、歯を叩くこと九通。ひそかに咒して曰く、太帝散靈五老、真に反る。泥丸玄華、精を保ちて長く存す。左に廻りて月を拘え、右に日根を引く。六合清練して百疾愈ゆ。因て唾を咽むこと三過、常に数々之を行わば歯をして痛まざらしめ、髪かたく、白頭ならずして脳痛まず。

又云う。東向して坐し、不息、四通、歯を啄くこと二七、歯痛の病を治す。大に口を張り、歯を啄くこと二七、一通二七、また解すること四通、中間その二七、大勢に意を以て消息す。病瘥てやむ。復た疼痛せず。病を解して鮮白にしてくもらず。また疎離ならず。久行してやまざれば能く金剛を破る。」

導引法は現世を超越して天命を全うし、不死の人、仙人となって天人合一の境地に至ることを目的とする行法である。この目的のために、呼吸を整え、気をめぐらせ、精としての唾液を飲んで心身の調和をはかるのである。

導引法は決して荒唐無稽な呪法ではなく、心身を整えて健康を増し、病を癒す現実的医方である。現代でもその効果は或程度認められるが、巫医共存の古代にあっては、高い評価を受けて実用に供されていたのである。

石田氏¹⁰⁾によれば、「有神論の時代において、生氣一死氣、魂魄神氣の概念は医療の根本概念であったから、それと同根の呪法が医療の中に深く浸透していても不思議ではない。養生方はかなわぬ時の神だのみではなくて、現実的治方として引用されているのである。」と言われる。

上述のように、歯痛候、牙痛候、齒痛候は、その病態は3者同一の疾病であるが、相違するところは牙と歯各々部位を異にする点である。歯痛候は両者を総合して概説した総論というべきものだが、単に歯牙の疼痛症のみならず、歯痛諸病全体に通ずる基本的病理論でもある。

歯痛候のはじめにある「歯は骨の終る所、髓の養う所」とは、「靈樞」五味論に「歯は骨の終る所なり」とあり、「素問」上古天真論に歯を養うものは腎氣（即ち髓）であることを述べている。また「手の陽明の支脈は歯に入る」は「靈樞」経脈篇に明らかである。

「陽明の脉虚し、牙齒を榮する能わず、為に風冷傷る所となる。故に疼痛するなり」は、「素問」大陰陽明論に、賊風が虚を侵し、内傷に乗じて侵入することを述べているのに相当し、また「靈樞」百病始生篇に「百病の始めて生ずるや、皆、風雨寒暑清湿喜怒に生ず。喜怒節ならざるときは則ち蔵を傷る。風雨は則ち上を傷り、清湿は則ち下を傷る」とあり、邪氣蔵府病形篇には「(邪の)人に中るや、まさに虚時に乗じ……。面に中るときは則ち陽明に下り……」とあるように、風冷の邪氣が経絡（陽明脉）の虚に乗じて体内に侵入し、歯痛を起させるという内経の理論を「病源」に引用したものである。

後半の蟲による牙齒の蠹蝕と痛みの理論は内経にはないが、「病源」では歯痛候・牙痛候・齒痛候・牙齒蟲候・牙蟲候・齒蟲候・齒蠶候・齒落不生候に見られ、当時、歯痛病の大きな原因の一つと考えられていたことが知られる。

後世に与えた影響

「病源」の症候分類は後世の模範となり、唐宋を通じて各医書はいずれも症候分類に於て、多かれ少なかれ「病源」を基準としている。

歯痛を歯痛候・牙痛候・齒痛候の3つに分類する点については、唐末の「外台秘要方」ではほぼ同様に、宋代の「太平聖恵方」では全く同様に分類しているが、北宋末年の「聖濟總録」と日本・平安中期の「医心方」では歯痛を3つに分けることなく、歯痛候の一つにまとめて記載している。夫々の編著者は「病源」を範としながらも、そこには自ら時代の流れや編者の個性によって、少しずつ変貌をもたらしているのである。

むすび

「病源」では、歯牙の疼痛を歯痛候・牙痛候・齒痛候の3つの症候に分類しているが、分類の根拠は疼痛の部位によるものである。即ち、牙は臼歯部を、歯は前歯部を指し、牙齒は臼歯と前歯を綜合した呼称である。

症候の説明文は、各候とも、冒頭に経脉の走行を用いた病態の解説を載せている。この場合、疼

痛を起す原因となる外邪は風冷である。加えて蟲が齒牙を食して痛みを起す場合もあることを述べ、その治方として、鍼灸では治らないが局所に藥を塗布すれば蟲が死んで痛みが止ると述べている。

更に齒痛候では、養生方を引用して齒痛に対する導引法を説明し、それによる齒痛の予防と治方を述べている。

「病源」における齒牙の疼痛の分類は後世に強い影響を与えたが、必ずしもそのままの形では踏襲されず、3候が1つにまとめられている場合もある。その理由は、牙齒痛候・牙痛候・齒痛候の3候は、ただ齒列の部位を異にするだけで、各症候の本態は同一であるからに他ならない。

文 献

1) 巢元方：諸病源候論，南宋版，東洋医学研究

会，1981（復印本）

- 2) 唐・唐元度撰，九經字樣，四庫提要，經，小学類。
- 3) 唐・慧琳撰，一切經音義，朝鮮京城帝国大学法文学部編，京城，1931（慶尚南道海印寺藏版重刊）
- 4) 馬王堆漢墓帛書整理小組編，五十二病方，文物出版社，北京，1979。
- 5) 白川 静：甲骨金文学論集，朋友書店，京都，1974。
- 6) 戴一萍：殷契微瑩，1951。
- 7) 楊樹達：積微居甲文說卜辭瑣記，中国科学院，1954。
- 8) 聞一多：聞一多全集選刊二，古典新義，古典出版社，北京，1956。
- 9) 小曾戸 洋：小品方，現代東洋医学，6，4，1985。
- 10) 石田秀実：「医心方」冤詞，第3回北里東医研，医史学研究室，総合研究検討会。